

『焼き場に立つ少年』

故 ジョー・オダネル氏 撮影



この写真を見て何か心で感じ取れましたか・・・？78年前、この日本で確かに起こっていた事実。みんなと歳のかわらない少年の表情、格好、姿勢・・・。

自分の「心」の目で見てみると、今の自分の「心」が見えてくるのでは？

佐世保から長崎に入った私は、小高い丘の上から下を眺めていました。10歳くらいの少年が歩いてくるのが目に留まりました。おんぶひもをたすきにかけて、幼子を背中にしょっています。

少年の様子はあきらかに違っていました。重大な目的を持ってこの焼き場にやってきたという、強い意志が感じられました。足は裸足です。

少年は焼き場のふちまでくると、硬い表情で、目を凝らして立ち尽くしています。少年は焼き場のふちに、5分か10分も立っていたのでしょうか。白いマスクをした男たちがおもむろに近づき、ゆっくりとおんぶひもを解き始めました。私は、背中の幼子が、すでに死んでいることに気づきました。

男たちは幼子の手と足を持つと、ゆっくりと^{ほうむ}葬るように、焼き場の熱い灰の上に横たえました。まず幼い肉体が火に溶けるジューという音がしました。それからまばゆいほどの炎がさっと舞い上がりました。真っ赤な夕日のような炎は、直立不動の少年のまだあどけない頬を赤く照らしました。

その時です。炎を食い入るように見つめる少年の唇に、血がにじんでいるのに気づきました。少年があまりにきつく噛みしめているため、唇の血は流れることなく、ただ少年の下唇に赤くにじんでいました。

夕日のような炎が静まると、少年はくろときびすを返し、沈黙のまま焼き場を去っていきました。背筋が凍るような光景でした。

(インタビュー・上田勢子)

[朝日新聞創刊120周年記念写真展より抜粋]